



日本の色彩語

現代文の授業は内田樹の「ことばとは何か」に入っていることだろう。私は国語の教員をしているせいか、評論文の中では言語論が好きである、というか、「視線のカスケード」的に言えば、言語論が好きだから国語の教員をやっている、なのかもしれないが（笑）。

さて、「赤い」「青い」と言うのに、「緑い」と言わないのはなぜ？ という宣伝文句で最近話題の本がある。橋本陽介『日本語の謎を解く』（新潮選書、2016）で、早速買って読んだところ、色々勉強になった。筆者は慶応大の講師だが、慶応志木高校の講師もしていて、高校生に日本語に関する疑問を書いてもらい、それに答える形でこの本を書いている。だから、先の疑問も高校生の疑問ということになる。この疑問に対する筆者の回答は直接読んでもらうとして、それに関連する色彩語の古典常識を紹介しよう。

*

先の疑問に答えた部分に紹介されているのだが、色彩語に関してはパーリンとケイ（二人ともアメリカの学者）の有名な研究があって、それによると、色名を二つしか持たない言語では必ず「白と黒」、三つしか持たない言語では必ず「白、黒、赤」、そして、四つしか持たない言語では、これに「緑」か「黄」が加わるという事実があるらしい。人間の認知能力（この場合は視力）にはそれほど差がないから、同じような結果になるのだろう。

ところが、日本の古典に登場する色彩語はちょっと違うのである。古典には「若草色」とか「萌葱（もえぎ）」「蘇芳（すおう）」といった色々な色が登場するが、その根本にあるのは実は四色で、その四色が「白、黒、赤、

青」なのである。つまり、前述の研究結果と異なり、「青」が第四の色として登場するのである（パーリンとケイも、この日本語の特徴を指摘しているとのこと）。

*

しかし、日本語ではなぜ「青」が加わるのであろう？

例えば、4つで一組になっている言葉を何か思いつくだらうか？ すぐに思いつくのは「春夏秋冬」、そして「東西南北」であらう。

そこで、『羅生門』に登場した「朱雀門」を思い出してほしいのだが、朱雀とは、赤い鳥の姿をした南の神であった。つまり、「春・東・青龍」、「夏・南・朱雀（赤）」、「秋・西・白虎」、「冬・北・玄武（黒）」が、古代中国から伝承した想像上の神であり、その中のこの四色があるのである。これが、日本の色彩語に「青」が含まれる一つの理由ではないかと考えられる。

もう一つは、物の見え方の「淡し（ハッキリシナイ）←→著し（ハッキリシテイル）」の対比が「青と白」に対応し、「暗し（暗イ）←→明し（明ルイ）」の対比が「黒と赤」に対応するとする説である。正月に「白馬節会」という行事があるが、これは「あをうまのせちえ」と読み、天皇の前に馬が引かれてくるのだが、その馬の色は灰色だったらしい。つまり、「淡い色」をしていたのである。

*

「目には青葉山時鳥（ほととぎす）初鯉」は江戸時代の山口素堂の名句であるが、緑は「青」で表現される。つまり、日本語では、緑は「青」に含まれていたのである。